
ハツカノ

心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハツカノ

【Zコード】

Z8475A

【作者名】

心

【あらすじ】

ずっとずっと好きだった女の子と付き合う事になった拓哉。そわそわしながら待ち合わせ場所に向かう途中、カレは真っ白くて小さな子猫に出会う…。初投稿作「ハツカレ」の”たくちゃん”サイドから書いてみた作品です。「ハツカレ」ではゆうの気持ちを、「ハツカノ」ではなくちゃんの気持ちを、私なりに表現してみました。1話だけでも良いし、合わせて読んで頂けたらとても嬉しいです よろしくお願いします。

現在2時20分。俺は居たまれば、教室を出た。
授業なんてとっくに終わっていた。でも、待ち合わせまでにはまだ時間があるんだ。

”木曜日の3時に、木の葉公園で”

このフレーズが何回頭をめぐったか分からぬ。
思い出すたび、何だかそわそわして落ち着かなくなる。
無意識にポケットに手を突っ込んで、ぐっと唇をかみ締めた。

下駄箱で靴を履き替えて、広い校庭に出る。

真冬の冷気が、一気に自分を取り巻くと、身体がガチガチ震えた。
ずっと暖房のついていた室内に居たもんだから、寒くてたまらん。

その時、はつと気が付いて俺はカバンに手を突っ込んだ。

引っ張り出したのは紺色のマフラー。

：俺の宝物。

それをくるくると首に巻いて、近くのベンチに腰を下ろした。

目の前では、野球やらサッカーやラニースやら、この寒い中、みんな部活に励んでる。

「ばしん！…

「いつてー」

一人ベンチでぼーっとしてると、後ろから何かで後頭部を思い切り殴られた。

振り向くと、友達の智輝がニヤニヤして立っていた。

ちなみに「イツと俺は、小学校の頃からの腐れ縁だ。

「とも、いつてよ。なにで殴ったん？」

「じめんじめん、だつて拓哉つたら顔がニヤニヤしてんだもんよ」「べ、別にニヤニヤなんてしてねーよ…」

「してたよー！」

つべこべ言って、智輝が俺の隣に座る。

「たくつたら、テートかい？」

「…………」

「図星かー！」

「黙れつたらー！」

俺が怒鳴つたら、智輝はいつも面白がりにニヤニヤして、気持ちが悪いぐらいだ。

動搖している俺の肩に、ばしん、と腕を回してきた。

「な、なんだよー！」

「あの”夕貴チヤン”だろ？そつかそつか、お前つてばつこになあ

…」

「そろそろ殴るが、智輝」

「じめんつてば」

その時、ポケットの中のケータイが鳴った。

画面には”ゆづ”と出ていた。

俺の胸ん中が、一瞬だけ熱くなつたような気がした。

”あと30分で授業が終わるよー待たせりやつじめんね（^-^）”

”いいよ、気にすんな。授業ちゃんと頑張れよ”

”ありがとう！先生厳しいから、あとは授業終わるまでメール出来ないけど、終わったら急いで行くからね！”

”うん、分かった。あとでな”

パタン、とケータイを閉じる。

：視線を感じて隣を見ると、智輝が物凄く何か言いたそうに俺を見てた。

「じゃ、俺は行くから」

「たく、俺も行きたい！」

「お前はなあ」

「冗談だつてば。俺はまだここにいるわ」

「そつか、じゃあな」

智輝と別れて、門を出た。

木の葉公園に向かう途中、コンビニに寄つてあつたかいお茶を買つた。

何しろ今日は寒い。雪でも降りそつながらいだ。

お茶を飲みながら歩いていると、広い芝生だけの公園があつた。

その公園の隅のほうで、なにやら近所の子どもたちが一箇所に集まつて何かを覗き込んでる。

俺も思わず足を止めた。

「なに見てんの？」
近くに行つて話しかけると、5~6人の子供もがいっせいに俺に振り向いた。

「おにこちゃん…ね」
「？？？」
「ねこ…ねこがね、いるの！」
「猫？」
「そう、じんなにひやいの！」
「まつちうなのー」
「ちつやいのー」

なにやら必死で訴えようとじててくれたんだけど、よく分からぬ……。

「どれどれ、お兄ちゃんにも見せてくれ」
そういうて屈むと、子どもたちはにっこりしてくれた。
「これ！」

一人の少年が指差した先が、俺の目に飛び込んだ。
そこにあつたのは、小さなダンボールが一つ。
中をのぞくと、なにやら白くてちっちゃな生き物が、ふかふかのタ
オルケットの中から顔を出した。

それは、真っ白で、茶色に瞳をした、まだ本当に小さな、子猫だつ
た。

「わあ……」

その透き通る様に綺麗な存在に、思わず声が出る。

「あれ……」

ダンボールの隅に、空色の封筒の手紙を見つけた。
中には紙が一枚だけ。

字からすると、女人人が書いたんだと思った。

「誰かこの猫ちゃんを飼つてあげて下さい。生まれたばかりの女の子です」：だって

顔を上げると、子どもたちが俺を真剣な顔で見ていた。

「おにいちゃん、どうしたの？」

「うーん、この猫ちゃん、捨てられちゃったみたいだ」

子どもたちはとても複雑そうな顔をした。意味が分かっているのか、
いないのか…。

「あのな、みんなよく聞けよ！」この猫ちゃんにはな、今おうちがないんだ」

子どもたちはバラバラに頷いた。

「だからな、この猫ちゃん、お兄ちゃんがおうちに連れて帰りたい
んだけど、どうかな？」

「おにいちゃんがかうの？」

「うーん、飼うか…そうだなあ。飼うんじゃなくて、一緒に暮らす
んだよ」

「くらすの？」

「そうそう、家族になるんだ」

「おうちのひとにおこられちゃうよ…」

「大丈夫だよ、この猫ちゃん可愛いからー！」

俺はダンボールに手を突っ込み、小さな子猫をそっと抱きかかえた。
子猫は思つた以上におとなしくて、人懐っこい。
それと、想像以上に小さくて、纖細な生き物だと思つた。

「みて『ちらん、可愛い』」

子どもたちは目をキラキラさせて子猫を見つめていた。

それから子猫を抱えて、子どもたちと別れた。

木の葉公園に着いたのは2時55分だった。
まだ誰も来ていない。

俺はブランコの脇でしゃがんだ。
胸に抱いていた子猫を手の上に乗せると、「みー」と鳴いて、俺を見つめる。

「可愛いなあ、お前」

なんか、こいつといふと気持ちがやわらかくなれる気がしてくる。
生き物って不思議。

公園の時計は、58分を指した。

俺はため息が出た。白い息がぼんやりと現れ、すぐに消えた。

「なあ、俺の話聞いてくれるか?」

猫になんて話しかけて、馬鹿みてーだなって、自分で思つ。まあいいか。

「俺な、じじいで告白したんだぜ。夕貴に

そり、あの日。

やつと気持ちが言えた、俺の大切な女の子に。
寒かった。雪の中が降つてて。必死の想いで伝えた言葉に、涙に笑

顔を浮かべて答えてくれた。

「わたしも拓哉くんが大好きだよ」つて…。

思い出すと頭がぼうっとする。

今日会のは、あの日以来だ。

めつけや楽しみだけじか、本当はずいへ不安だよ。

あの時の記憶が、本当は全部夢だつたらじつじょつて…。

君が来なかつたら、俺はどうじょつ。

マフラーの間から白い息が何度も溢れた。

詰まるよつたため息が、とめどなくもれて止まらないでいた。

時計を見ると、いつの間にか3時を過ぎてる。
途端、心拍数が物凄い勢いで上昇し始める。

「…うわー、猫ちゃん、じつじょつ！俺なんか凄いじきじきす
んだけ…」

だけど子猫は、また「みー」とだけ鳴いた。

「たくちやんー。」

俺は心臓が飛び出すかと思った。

…たくちゃんって、俺の…こと……？

ゆつくり振り向くと、そこには俺と同じマフラーを巻いたちつこい
女の子が、ひょっこり立っていた。

わらわらの肩までの黒髪と、深緑色のパコートを着て、寒さに頬と
鼻を赤く染めて、そこに居た。

紛れもなく、俺の大好きで大好きでたまんない女の子。
わあ…ほんとに来た…。

俺はほつとしたのと、大好きな女の子を囁いたので、すりこい
ヤけた。

何しろ”たくちゃん”だつて！初めて呼ばれてしまった。
ここに智輝がいたらなんて言われるか…。

立ち上がり、ゆうに近づく。そつだ、子猫を見せなきや。

近づくと、こつそつ可愛いく。手とか、足とか、小さくて。

俺なんて靴もカバンもボロボロなのに、すこしきれいに使つてると、
女の子だなあって思つてしまつ。

「ゆう、子猫だよーめつつけや可愛いくー」

一瞬すこしく驚いていたけど、ゆうは素直に子猫を抱いた。

ゆうが子猫を見つめる顔は、笑顔だつたり、真剣な顔になつたり、
驚いたり。

時々びつくりするぐらご優しい顔にもなつたりして…見てるこつち
までどきどきしてしまつ。

ゆうは子猫が気に入つたみたいだ。俺の決心はせりて固まつた。

「たくちやん、IJの猫ちゃんどうするの？ またその公園に戻すの？」

「どうして？」

「可哀想だよ……」こんな真冬の下にいたり、もしかしたら……」

「ゆうなら、絶対そう言つと思った」

ゆうがどれだけ優しい子かよく知つてる。

心配そうに俺を見るその目が、ヒトモヒトモ愛おしくて……。

こんな気持ちを抱いたのは初めて。正直、ちょっと困惑つたりして

……。

俺はゆうの頭をそつと撫でて、不安そうにしてる顔を覗き込んだ。ぱちくりと、驚いたように俺を見る。長いまつげがきれい。なんだが自分をじつと見てるゆうが、凄く可愛く思えた。

……ほんと、馬鹿みてーに惚れてるらしー。

「ゆうが心配すると思つたからね、その猫ちゃん、俺が家に連れて帰つて、一緒に暮らす事に決めたの」

「えつ、たくちやん飼えるの？」

「うーん、飼うつて言い方は好きじゃないんだよね。なんか支配してるみたいで……だから”一緒に暮らす”んだよ」

「本当に？ ほんとに一緒に暮らしてあげられるの？」

ゆうの顔がぱつと明るくなつた。本当に嬉しそう……なんか、俺まで嬉しい。

「その子、女の子みたいなんだ。今日から俺の妹！」

「こもつと?」

ゆづがくくつと笑った。

…ゆづに笑われた。まあ、いいか。

「猫ちやん、良かったね! 今日からたぐひちゃんの妹だつて…」

にじにじしながら嬉しそうに子猫に声をかける。

ゆづと一緒に子猫を覗き込むと、猫はきょとんとした顔で、俺たちを見つめてた。

俺は自分のマフラーを外して、それで子猫をやせこへ包んだ。
「ゆづが名前をつけてあげて」

「あ、あたしが?」

「うん、つけてあげて」

それが一番だと思った。

俺が連れてきた猫に、ゆづが名前をつける。

…なんか繋がってる気がする、なんて。

子猫を見つめるゆづの顔は真剣で、一生懸命考えてくれてるみたいだ。

それがまた嬉しかったりする。

「…………らぶ……がいいかな」

「らぶ?」

「そう、ラブちやん。愛をこっぽい注がれて、愛されて生きられま

すよづにっしー」

「…………らぶ。ゆづにっしー」

「ほんと?」

俺は子猫に顔をつずめて、嬉しくてたまんなくて、思わず頬ずりした。

「お前良かったなー! ラブなんて可愛こ名前をゆづからもらえて。お

前は俺をお兄ちやんて呼べよ?「

俺が言つた言葉に、ゆうがまた笑つた。

なんだか幸せだと想ひ。『んな些細な瞬間が。

小さな子猫が運んできてくれた時間は、穏やかで、暖かくて…。

今田からラブついて浮ばれる』ことは、俺の家で暮らすことになった。

ゆうが、『ラブ、つてつけてくれた名前は、ぴったりなんじゃないかって思ひ。

俺とゆうの恋をこつまでも繋いでくれるよつな、そんな気がした。

ラブをそっと肩の上に抱えると、いきなり予想もしない事が起つた。

「…………？」

ゆうが、俺に思いつきつけてきてくれた。

俺の胸に、ぎゅうって、顔をうずめてる。

あ、あんまりにも可愛くて……何だか思わず胸が奮えた。
ほんのり、何かのコロンの様な、微かに良い匂いがする。
胸が締め付けられるような気持ちになる……やばい。

「たくちやん、…………だいすきだよ」

「……うん。俺もめっちゃだいすきー。」

俺もゆうに両腕を回して、ぎゅうって抱き寄せながら、髪をくしゃくしゃつて撫でた。

女の手を初めて抱きしめた。片腕など、なんかめつちや小さく感じた。

そっと扱わないと、壊れちゃいそうだな……。

俺の手の中になんてすりすり入り込めるか、ちひかひこ頭。さういひの髪。

大切にしたい。

小さいやつと、少セコラブ。これから、まつじゅうと俺がやらなければ。

「ゆづ、とりあえず俺たち行こう。ラブをあつたかいとこに連れて

つてやんなき」

「えつ……たへぢやんぢー?」

「うふ、せり

俺は思い切って、ゆづの手を握った。

初めて手を繋いだ……予想以上に小さい手に、また驚く。

実は凄い緊張してた事、どうか悟られなによい。

「それじゃ、しゃばーつーつー。」

俺とゆづ(?)は歩き出した。

俺はゆづの手を引いて、ラブを大事に肩に抱えて。付き合って初めての日正式ゆづをウチに連れてくる事になるとほ思わなかつたけど、まあいいか。

俺の部屋の汚れ、ゆづが汚れさせよつ……。ひみつ。

「みー……」

肩の上で、ラブがのん気に鳴いた。

「もう、ラブのせいなんだからね」

「ん?なんか言った?」

「う、ううふふ、な、何でもない!ー!」

ゆうが俺の手をきゅって握つて、てこてこ着いてくる。

ずっとずっと大事にするんだ。

初めて出来た、俺の世界で一番大切な彼女を。

(後書き)

たくちやんからみつへの気持ちが書けていつして形に出来て嬉しかったです。

さらにこの一人について書いていきたいと思いました。

最後まで読んでくださいって本当にありがとうございましたーー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8475a/>

ハツカノ

2010年12月14日14時59分発行